

玉造小町壯衰書研究續

―幸地嚕上詠之賦再考―

枋尾 武

前稿^注に於て曹植の釋愁文が幸地嚕上詠と同じであることを述べた。本稿では曹植と佛教とのかがわり、釋愁文と玉造(以下玉造小町壯衰書を略稱)との影響關係について考えてみたい。

一 曹植と佛教

曹植の傳記については前稿で簡略に述べた。また

樂天 秦中吟之詩

幸地 魯上詠之賦

が對をなしていることを書いた。

曹植の傳記で最も詳細な内容を持つ書は晉の陳壽(AD三三二―九七)

撰、宋の裴松之(三三二四五)注の正史三國志である。これに民國の盧弼の集解、清の錢大昕の考異を加えにものがある。法この書の魏志書卷十九に陳思王植傳がある。この傳の末尾にのちに述べる曹植が魚山に登つて梵唄を作つたとされる語が「植登魚山臨宋阿瞿然有終焉之心」とわずかに書かれるのみで、曹植と佛教との交渉を明白に知ることができない。

曹植と佛教とのかがわりを明確に書いている文獻は佛典に求めることができる。その古い記録は梁の慧皎の撰になる高僧傳(梁天監一八五二九)卷十三、經師第九の論に「自佛大教東流乃譯文者衆而傳聲蓋寡良由梵音重複漢語單奇若用梵音以詠漢語則聲繁而偈迫若用漢曲以詠梵文則韻短而辭長是故金言有譯梵響無授始有魏陳思王曹植深愛聲律屬意經音既通般若之瑞響又感魚山之神製於是刪治瑞應本起以爲學者之宗然天竺方俗凡是歌詠法言皆稱爲唄至於此土詠經則稱爲轉讀歌讚則號爲梵音原夫梵唄之起亦肇自陳思始著太子頌及瞻彌等因爲之製聲吐納抑揚並法神授と述べ、梵唄の定義と中國に於ける起源を曹植に求める。梵唄とは佛の徳をたええるとき、偈や頌に微妙な曲調をつけて吟詠諷誦することである。インドでは法言を歌詠する

のを唄といい、中國では經を詠ずるのを轉讀といい、歌讚を詠ずるのを梵唄と稱したという。曹植は漁父山に登り神の製せる響きに感じ、瑞應本起經に手を加えて太子頌を作り、菩薩藏太子頌を著したという。唐代の道宣撰廣弘明集（麟德元（六六四）の辯惑篇）には曹植の辯道論とその傳を記し、唐の道世の法苑珠林（總章元（六六八））卷三十一、六唄讚篇（三十四）にも、逸話を加えて傳記を載せる。

（述意部）陳思王 曹植 字子建 魏武帝 第四子 也。幼合珪璋 十

歲屬文。下筆便成。初不改定。世間術藝無不畢善。邯鄲淳見而服稱爲大人。植每讀佛經。輒流連嗟觀。以爲至道之宗極也。遂製轉讀七聲。升降曲折之響。世之諷誦咸憲章焉。嘗遊漁父山。忽聞空中梵天之響。清雅哀婉。其聲動心。獨聽良久。而侍御皆聞。植深感神理。彌恪法應。乃摹其聲節。寫爲梵唄。撰文製音。傳爲後式。梵聲顯世。始於此焉。其所傳唄凡有六契。

珪璋は儀式に使う玉であるが、曹植の幼にして人品の高いことをいう。邯鄲淳は三國魏の人。投壺の賦千餘言を作つて文帝に獻じ、帛千匹を賜わらる。漁父山は山東省東阿縣の西八里

にある山。曹植がこの山で梵天の唄を聞いて梵唄を作った。

三世の天台座主となる圓仁（慈覺大師）延暦二（三）真觀六（七）元四（五）八（九）六（七）四（五）が入唐してこの梵唄を傳えたという。これを良忍が山城國大原の來迎院で擴げたのが魚山流といい、天台系の梵唄聲明である。大原の地を魚山ともいう。一方、空海（寶龜五）承和（二七）四（五）八（九）三（四）も勅許を得て東寺に於て梵唄聲明の指導をし、弟子の眞雅が梵唄をもつて權律師となつた。天台系の聲明集には家寛法印撰の『魚山聲明集』（承安年間二七二七四成立）があり、眞言系には長惠撰の『魚山鈔』（魚山叢書）が著名である。

この曹植流の魚山梵唄は日本では聲明といわれる。『塵添塏囊鈔』（天文元五三三）卷十五ニに、『顯聲明集』（魚山書事）と題して大原流の聲明の沿革を述べ、中國の諸經要集（附勝林院來迎院聲明相傳陳玉聲明起并七步等事）・兼名苑（瑞應經等）を引いて説明を加えている。また曹植の『七步詩』を付したのはこの詩が古來日本に於て評判であつたことを意味する。

かくて天台・眞言兩宗で高名であつた曹植が眞言系の玉造に強い影響を與えていたとしても不思議ではない。また、叡山文庫に玉造一本があるのも曹植との密な關係から推しても

おかしくはない。

聲明（せうめい）という音聲を伴う形式の頌詠は唱導文學である玉造にはふさわしいものであった。また「願文」の中でも「故人のため」に作善追福を營む施主の願意を述べた文（ぶん）という一形式も玉造に影響を與えていることはすでに指摘されており、用語の上では『遊仙窟』・『文選』・『玉篇』・『自氏文集』・『曹植集』等が用いられている。紀長谷雄の「貧女吟」等にも類似點があるが、形式面では聲明は無視できないであろう。

二曹植の釋愁文と玉造小町壯衰書

前稿で讀下し文にしておいに釋愁文と再録して注を加えてみよう。

釋愁文

曹植

- 1 予（こ）以愁（しう）慘（さん）
- 2 行（ゆ）吟（ぎん）路（ろ）邊（へん）
- 3 形容（けいよう）枯（こ）悴（さい）
- 4 憂（う）心（しん）如（ごと）焚（ん）火（か）
- 5 有（あ）玄（げん）虛（こ）先（せん）生（せい）

予愁慘を以て
行吟路邊に吟ず
形容枯悴し
憂心焚火が如し
玄虛先生有り

（一）路邊 玉造に後修邊の路頭名義抄に

佛站路法（ぶつたちろほふ）ミナ。邊佛よ頭佛下本

ホトリ。

（二）形容枯悴 首標經に「形色枯悴」。玉造に容

貌顯頼の氣力顯頼

- 6 見而問之曰
7 子將何疾
8 以至於斯
9 答曰
10 吾所病者愁也
11 先生曰
12 愁是何物
13 而能病子乎
14 答曰
15 愁之爲物
16 惟惚惟恍
17 不召自來
18 推之弗往
19 尋之不知其際
20 握之不盈一掌
21 寂寂長夜
22 或羣或黨
23 去來無方
- 見て之に問ひて曰く
子將に何の疾にて
以て斯に至るや
答へて曰く
吾が病める所の者は愁なり
先生曰く
愁は何物にて
能く子を病くや
答へて曰く
愁の物爲るや
惟惚惟恍
召かずして自ら來り
之を推せども往かず
之を尋ゆるも其際を知らず
之を握れども一掌にも盈たず
寂寂たる長き夜
或は羣れ或は黨る
去來に方無く

③玄虛先生 玄虛は眞深く虚無す

世界又老莊の説をいし道。

晉の宋纖は玄虛先生と諡さる。

④何物 玉造 袋客何物と裏客何

物と篋入何物

⑤惟惚惟恍 惚恍 忘我の境地。

スげんやうしたふ。つかみどころなし。

⑥寂寂 さびしく静か。このよう

な夜に愁がやってくるという。

- 24 亂我精爽
25 其來也難追
26 其去也易追
27 臨餐困於哽咽
28 煩冤毒於酸嘶
29 加之以粉飾不澤
30 飲之以兼肴不肥
31 溫之以火石不消
32 摩之以神膏不稀
33 受之以巧笑不悅
34 樂之以絲竹增悲
35 醫和絕思而無措
36 先生豈能爲我著龜乎
37 先生作色而言曰
38 予徒辯子之愁形
39 未知子愁所由生
40 吾獨爲子言其發矣

我ガ精爽を亂す
其の來るや進み難く
其の去るや追ひ易し
餐に臨み哽咽して困み
冤に煩え酸嘶して毒む
之を加ふるに粉飾を以てすれども澤はす
之を飲むに兼肴を以てすれども肥えず
之を温むるに火石を以てすれども消えず
之を摩るに神膏を以てすれども稀がず
之を受くるに巧笑を以てすれども悦ばず
之を樂むに絲竹を以てすれども悲を増す
醫和思を絶ちて措無し
先生豈能く我に著龜を爲さんや
先生色を作して言ひて曰く
予徒に子の愁なる形を辯じ
未知子の愁の由り生ずる所を知らず
吾獨子の爲に其の發を言はん

(4) 火石 火打石。これで火を起した。
(5) 神膏 良く效くぬりぐすり。
神農の作り出したものであろう。

- (6) 巧笑 婦人が愛らしう笑う。
(7) 絲竹 絃樂器と管樂器。音樂の總稱。
(8) 醫和 秦の良醫。晉の平公の病を治療不能と診斷し趙孟

- 41 今大道既隱
 42 子生末季
 43 沉溺流俗
 44 眩惑名位
 45 濯纓彈冠
 46 詠詠榮貴
 47 坐不安席
 48 食不終味
 49 遑遑汲汲
 50 或慘或悴
 51 所需者名
 52 所拘者利
 53 良由華薄
 54 凋損正氣
 55 吾將贈子
 以無爲之藥
 56 給子以澹泊
 之湯

今大道既に隠れ
 子末季に生る
 流俗に沉溺し
 名位に眩惑す
 濯を濯ひ冠を彈き
 榮貴を詠詠ひ
 坐すれども席を安ぜず
 食へども味を終ぜず
 遑遑汲汲として
 或は慘み或は悴む
 需る所の者は名あり
 拘る所の者は利あり
 良に華事に由り
 正氣を凋め損ふ
 故將に子に贈るに
 無爲の藥を以てし
 子に給するに澹泊の
 湯を以てせん

に良醫と稱された。

(四) 大道 老莊における道。宇宙の根本。

(五) 濯纓彈冠 冠の紐を洗い、冠の塵を拂って出仕の準備をする。

(六) 華薄 華美輕薄をいう。

(七) 無爲 老莊の理想とするもの。人為を加えず、自然にまかせろ。

これぞ慈に效く良藥とする。

(八) 澹泊 まじり氣なく無欲。あつさりとした變湯。

57 刺子以玄虚之針
58 冬子以淳朴之方
59 安子以恢廓之宇
60 坐子以寂寞之牀
61 使王喬領之攜手游
62 黃公與子詠歌而行
63 壯生爲子具養神
之饌

64 老聃爲子致愛性
之方

65 趣遐路以棲跡
66 乘輕雲以高翔
67 於是精駭意散
68 改心回趣
69 願納至言
70 仰崇玄度
71 衆愁忽然
72 不辭而去

子を刺すに玄虚の針を以てし
子を養するに淳朴の方を以てす
子を安するに恢廓の宇を以てし
子を坐するに寂寞の牀を以てす
王喬をして子と手を攜へて遊び
黃公をして子と歌を詠じて行ません
莊生は子の爲に養神の饌を具へ

老聃は子の爲に愛性の方を致
せん

遐路に趣き以て棲跡し
輕雲に乗じて以て高翔せん
是に於て精駭き意散じ
心を改め趣を回らせん
願くは至言を納れ
仰いで玄度を崇めん
衆の愁忽然として
辭せずして去らん(藝文類聚三五愁)

(四) 針 二教指歸

毛先生論に針を

瞻瞻 歸此直

(四) 王喬 周靈王の次

子。仙人になる

蒙求に王喬雙鹿

とある。

(四) 黃公 黃石公であ

らう。漢の張良

に兵法を教えた

隱士。

(四) 莊生 莊周

(四) 老聃 聃は老子の

字。

* 以上前稿に改訂を

加えた。舊集銓評

と本文の異同があ

るが原則として採

らず。

釋愁文は老莊楚辭の言葉で彩られている。佛書では曹植は道教を重んじないと述べるが、必ずしも當を得ていない。

王造の作者は、樂天の秦中吟を學び、幸地曹植の曹路、上詠を效つたというが、兩者から特に語彙を借りたわけではなく、文體を學び、貧富それそれの婚姻、あるいは人生の哀愁にその想を效つたものといえる。王造創作に當つては、自樂天の「長恨歌」「琵琶引」や曹植その他「文選」の中に見える作品あるいは六朝の文學作品類等が材料に使われたのである。

文體の特徴は楚辭における漁父辭、司馬相如の「子虛賦」、上林賦、ついでその影響を受けた曹植の「釋愁文」はいずれも問答體で文を構成している。「三教指歸」の文體も「釋愁文」に通うものがある。空海は「釋愁文」に想を得て「指歸」を書いたのではなく、うかが、龜毛先生等登場人物は「金光明最勝王經」が使われていることはすでに指摘^{チカサ}されているが、これは内容の影響というより言葉の利用である。

空海は「文鏡秘府論」や「龍鼓指歸」等に曹植の詩文に批評を加えている。引用はしないが、その關心の深さがうかがえる。

餘論になるが、「三教指歸」について次に二三の見解を述べた

い。この書は中國六朝の四六文の影響を濃厚に受けた美文である。玉造もまた四六文の影響を強く反映している。

三『三教指歸』について

玉造の出典の一つである曹植の釋愁文が三教指歸にも影を落しているのではないかという考えから二三その見解を披瀝したい。三教指歸の出典について川口久雄博士は漢風文化と平安文学^法に於て龜毛先生・兔角公・蛭牙公子は通玄の『三教指歸簡註』に金光明最勝王經を注することを指摘、虚亡隱士は司馬相如の『上林賦』の『乘虚亡與神俱』^法敦光注によるとし、假名乞兒は大師(空海)成安注であることを紹介している。龜毛・兔角・蛭牙は唐・慧琳一切經音義^法の金光明最勝王經に引用されてゐる。いま隋の寶賁の合部金光明經^法壽量品第二と唐の義淨の金光明最勝王經^法如來壽量品第二との該當本文を對比引用する

合部金光明經^法天正藏^法十六

王子即以偈答婆羅門言

設河駛流中^法可生拘物華^法

金光明最勝王經^法天正藏^法十六

童子即為婆羅門而說頌曰

恒河駛流水^法可生自蓮花^法

設使龜毛等
 佛身非虛妄
 假令蚊蚋脚
 如來寂靜身
 假令水蛭蟲
 如來解脫身
 兔角爲梯登
 邪思惟舍利
 鼠登兔角梯
 依舍利盡惑
 可以爲衣裳
 終無有舍利
 可以作城樓
 無有舍利事
 口中生白齒
 終無繫縛色
 從地得昇天
 功德無是處
 蝕月除修羅
 解脫無是處
 假使用龜毛
 寒時可被著
 假使蚊蚋足
 堅固不搖動
 假使水蛭蟲
 長大利如鋒
 假使持兔角
 可昇上天宮
 鼠緣此梯上
 能障空中月
 織成上妙服
 方求佛舍利
 可使成樓觀
 方求佛舍利
 口中生白齒
 方求佛舍利
 用成於梯登
 方求佛舍利
 除去阿蘇羅
 方求佛舍利

この偈に「世尊身舍利畢竟不可有(合部)」「斯等希有物或容可轉變世尊之舍利畢竟不可得(金光明)」というように佛陀の舍利骨身は得がたいものであり、これを、龜毛の衣裳、蛭蟲の白齒・兔角の梯登に喩えたのである。いずれもあり得ないものの喩えである。空海はこの偈により龜毛先生、兔角公・蛭牙白齒公子を造形した。龜毛・兔角・蛭蟲を同一偈文中に認められるのは最勝王經であるので、出典と認めてよい。

最勝王經には虚亡隱士と假名を兒は見當らぬかと考えるのはそう的を外したものともしえない。虚亡の亡は妄に通用字、虚妄は合部金光明經の偈に用例が見え、これを虚亡隱士のモデルと考えてもおかしくない。假名は兩經の分別三身品第三に「一切如來有三種身……一者化身、二者應身、三者法身……前二種身是假身、有是第三身、名為眞實有（合部）」といひ、如來の假名（化身、應身）のを兒ということになる。安成注のように空海を指すとすれば如來が空海という假名で佛法を説くのである。を兒は魏の慧覺の「賢愚經（太平眞經六（四五））」散檀寧品十九にを兒佛・を兒比丘等の名稱で呼ばれてゐる。

空海は鎮護國家を以て、その宗旨を立てた、これが眞言宗である。金光明最勝王經は奈良時代に傳來して以來護國經として第一に位置づけられたもので、空海はこの經を三教指歸の創作に利用したのである。にだし、本文は龍鼓指歸の序にいうように張文成の散勞書（遊仙窟という）や日雄の睡覺記、文選等外典の用語を大學在學中の學習によつて記憶し、創作に用いたものであらう。三教指歸と玉造との關係を云々するのは性急ではあるが、同じ流れの作品であることは言えるのでは

なやろうか。

四　むすび

玉造の作者と創作年代を知ることには最大の關心事である。にだ、言えることは元白詩筆舶來の記録のある仁明承和三年（八三六）頃以降の創作である。空海は最澄とともに桓武延暦二十三年（八〇四）に入唐し、大同元年（八〇五）に歸國しているので自樂天の作品は知っていたはずである。空海が『自氏文集』を入手し讀んだかどうかは不明である。前稿で述べたように玉造は小野小町ないしは玉造小町の事蹟を書いたという証拠もない。したがって題名は女人形哀書（記）であつてもよい。

題名の制約が不要ならば空海以後とすることもできる。空海の著作は習作も含めて現存しないものもあるうから、空海作説も否定できない。『貧女吟』の紀長谷雄（八五九—九一三）、三善清行（八七〇—九一八）から『續本朝往生傳』の大江匡房（一〇四一—一一二二）、『三教勘注抄』の藤原教光（一一〇六—一二四四）等まで幅広く検討する必要がある。

〔注〕

注₁ 『玉造小町壯衰書研究』幸地噲上詠之賦考『成城文藝』三號昭和三三

注₂ 『二國志心集解』藝文印書館又一九五七年北京古籍出版社 注が詳細で参考になる。

注₃ 般遮林梵語^{ハヤシ}の音譯。五。般遮^{ハヤシ}于句^{ハヤシ}という樂神が琴を持つて佛德を頌歌する。修行者の超自然的な力である天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通の五神通の人。曹植の聲律が般遮于句の奏するめでたい樂にかよつてことをいつ。

注₄ 魚山聲明集・魚山鈔 聲明類は大正藏八四所收。

注₅ 塵添堪囊鈔 二十卷二十冊。寛文ごろ開版。濱田敦・佐竹昭廣・笹川祥生編『塵添堪囊鈔・堪囊鈔』が索引・解題を加えて便利。

注₆ 聲明 注₄に引く聲明集にはそれぞれの文體に合わせた譜を傳えている。僧が法會に音聲を出して誦唱する經・頌・讚・願文等すべてに譜があり、願文類には單純な調子の朗讀に類したものがある。

注₇ 中村元『佛教語大辭典』願文の項參照。

注₈ 渡辺秀夫『小野小町異譚』玉造小町子壯衰書『及信天文学論集（一七号）』同『願文研究の一視点』『本朝文粹』所収願文を中心に『リポート』『笑間』（一七号）

注₉ 川口久雄『平安朝日本漢文學史の研究』第十五章『漢文体小説の

注
10

展開と將門記 第二節 唱導漢文と玉造小町子壯衰書に玉造の研究史と出典について書かれてゐる。また、同博士の『平安朝の漢文学』第三、平安朝前期の漢文学 三、王朝漢詩文芸の開花と梵門の風雅と詩人の國際交流に、『性靈集補闕』卷十の「九想詩十首」と敦煌曲子の九想心觀詩や伝東坡の九想詩が系列を同じくし、玉造小町子壯衰の唱導、戯劇のモチーフとなつたとする。

中大笠沙門迦羅密諦譯の『首楞嚴經』卷三に波斯匿王と世尊との對話が見られる。「佛言。如是大王。汝今ヲ生齡已。從衰老顏貌何如童子。之時。世尊我昔孩穉。膚腠潤澤。年至長成。血氣充滿。而今顏齡迫於衰耄。形色枯悴。精神昏昧。髮白面皺。逮將不久。如何見比充盛之時。佛言。大王。汝之形容。應不損朽。王言。世尊。變化密移。我誠不覺。寒暑遷流。漸至於此。何以故。我年二十。雖號年少。顏貌已老。初十。年時。三十。之年。又衰。六十。今六十。又過。于二。觀五十。時。宛然強壯。世尊。我見密移。雖此殂落。其間流易。且限十年。若復令我微細。世推其變。寧唯一紀。二紀。實爲年變。豈唯年變。亦兼月化。何直月化。兼又日遷。沈思諦觀。剎那剎那。今心念之間。不得停住。故知我身。終從變滅。」(大正藏十九)

この問答が玉造に影響を与えたかどうかはわからぬが、玉造の作者は知って

いたであらう。

注17 次頁參照。

注12 川口久雄『繪解きの世界―敦煌からの影―』所引『空海の文學と敦煌資料』2（明治書院）

注13 高麗藏一切經音義卷二十九ウ・エオ所引。可決の『新集藏經音義隨函錄第五冊所引』金光明最勝王經及び『合部金光明經』

注14 辻善之助『日本佛教史』第一卷上世篇第四章第四節『天台眞言の鎮護國家』による。